Vol.53
2026年8月25日
日本災害復興学会
JSDRR News letter

目次 -contents-

1 日本災害復興学会　大会巻頭言
複合災害からの復興過程から問い直す、復興のあり方と対話の場
篠田 隆行

2 大会概要

3 分科会概要

4 復興スケッチ
浜の暮らしと人をつなぐ古文書
中島 みゆき

5 中島みゆきさんインタビュー
「暮らしの記憶」と「災害の記憶」が交差する日まで
中島 みゆき

7 復興若者通信
伝え続けるということ
馬場 玲花

能登半島地震の被災地で「少し先の未来」を共に描く
飛川 優

8 山崎先生惜別欄

発行人 天野和彦
〒662-8501
西宮市上ケ原一番町1番155号 関西学院大学災害復興制度研究所気付
TEL：0798-54-6996
FAX：0798-54-6997
http：//f-gakkai.net/

※学会状況（2026年7月23日現在）
現在の会員462
正会員397・学生会員58
購読会員2・賛助会員3

日本災害復興学会　大会巻頭言
複合災害からの復興過程から問い直す、復興のあり方と対話の場

金沢大学副理事（研究支援・地域共創担当）
先端科学・社会共創推進機構　兼　能登里山里海未来創造センター　教授
篠田 隆行

2026年度の日本災害復興学会大会を金沢大学において開催するにあたり、ご協力くださっている関係各位および会員の皆様に心より御礼申し上げます。

また、大会の開催に先立ち、深く悲しいお知らせに触れなければなりません。本学会の会長代行を務められ、長年にわたり災害復興法学の発展と被災者支援に多大なご貢献をされた山崎栄一先生（関西大学教授）が、今年5月20日にご逝去されました。山崎先生は生前、能登の被災地に深く思いを寄せられ、今年度の大会を被災地である金沢大学において開催することを強く要望しておりました。被災現場に寄り添い続ける姿勢を貫かれた山崎先生のご遺志を深く胸に刻み、謹んで哀悼の意を表しますとともに、先生のご期待に応え得る大会とすることをお誓い申し上げます。

金沢大学がある石川県は、2024年元日に発生した令和6年能登半島地震、そして同年9月の奥能登豪雨という、相次ぐ大規模な災害に見舞われました。大きな地震動と津波、その後の復旧過程において襲った豪雨という「複合災害」は、インフラの途絶や人口減少が進む地域社会に深刻な被害をもたらし、従来の防災・復興の枠組みを超える多くの課題を私たちに突きつけました。

発災から約2年半という月日が経過した被災地において、極めて早い段階で本大会を開催することは、学会の発足以来、初めての試みとなります。未だ復興の道のりの渦中にあり、生活や生業の再建に向けた模索が続く「現在進行形の現場」に全国から研究者や実践者が集うことの意義は極めて大きいと感じております。単に現状の報告にとどまらず、被災地の空気感と課題を直に肌で感じながら、真に必要な「復興知」とは何かを現場から発信していくことが求められています。

さて、災害復興の理論と実践は、現場の切実な声とともに歩むものでなければなりません。本大会では従来の学会の枠組みをさらに広げ、専門の研究者や実務者だけでなく、地元の高校生をはじめとする次世代の担い手や地域住民の方々にも広く門戸を開く試みを実施いたします。未来の地域を担う若者たちが感じたこと、直面している課題、そして描き出す復興の展望を共有し、多種多様なステークホルダーが対等な立場で語り合う機会を創出したいと考えております。

設立当初より本学会が大切にしてきた「多様な立場・分野の人々が集い、議論を交わすことで新しい価値を創造する」という理念は、こうした複合災害からの復興過程にある現場でこそ真価を発揮するはずです。多様な主体が知恵を寄せ合い、課題と希望を語り合う本大会が、今後の被災地復興と学術の発展に向けた確かな一歩となることを願っております。

会員の皆様をはじめ、地域・社会の幅広い方々のご参加とご協力を心よりお願い申し上げます。

大会概要

9月26日（土）、27日（日）に、2026年度大会を金沢大学角間キャンパス北地区で開催します。

【開催方式】

今回の大会の研究発表では口頭発表を募集します。口頭発表で応募多数の場合は、ポスター発表となる可能性があります。すべてのプログラムは「対面」で開催します。

また、インターネット接続については、金沢大学はeduroam無線ネットワークが利用できます。本学が提供しているeduroam無線ネットワークを利用する方法については、事前に必ず所属機関にお問い合わせください。尚、eduroam　JPに加盟されていない方でインターネットに接続される場合は、各自で機器をご用意ください。

【1日目：9月26日（土）】

午前と午後にわかれて6つの分科会と全体会を行います。「令和6年能登半島地震を踏まえた行政と法の災害対応の再考」「南海トラフ巨大地震に備える長期・広域避難政策」「縮退する地域社会の復興学 ―自治・記憶・コミュニティを支える新たな視点―」「震災から15年、福島の今と未来を語る」「令和6年能登半島地震・奥能登豪雨後のこころのケアの実際とその意義」「災害復興とコミュニティ・レジリエンス―輪島市住民復興調査から―」が予定されています。夕方には6つの分科会での議論を共有するための全体会を開催します。

【2日目：9月27日（日）】

午前に口頭発表、午後に全体シンポジウムを開催します。口頭発表のプログラム、口頭発表の時間については決まり次第、当学会のウェブサイトで公開しますのでご確認ください。また、昼休み時間帯に、能登復興研究実践ポスターセッションを開催します。

【全体シンポジウム】

公開シンポジウムは、分科会、口頭発表、能登ポスターセッションの感想を共有しつつ、会場全体でディスカッションを展開します。

【エクスカーション】

今回の大会では現地エクスカーションは開催しません。

【交流会】

1日目の午後の全体会、次年度大会アナウンス終了後に、角間キャンパス内「ナカフクリ食堂」に於いて、交流会を開催いたします。事前申込・事前振込をお願いしておりますので、ご協力をお願いいたします。詳細はHP等で確認をお願いします。

【参加費・宿泊】

大会参加費は無料です。予稿集は印刷版の配布・販売を行いません。事前に予稿集を電子データ（PDF）で参加者に配布いたします。宿泊施設については、恐れ入りますが各自でご手配をお願いいたします。秋の連休期間に重なるため、ホテルの混雑が予想されます。ご宿泊を予定されている方は、お早めにご予約されることをお勧めします。

【アクセス】

金沢大学角間キャンパス北地区へは、金沢駅東口からバスまたはタクシーでお越しください。バスの場合、金沢駅兼六園口（東口）8番乗り場発、[93][94][97]金沢大学行き（兼六園下経由）に乗り、「金沢大学中央」バス停で下車してください。乗車時間はおよそ30分です。

当日は学内コンビニ・生協売店等は閉店しています。最寄りの一般コンビニ（ファミリーマート金沢大学前店）まで、徒歩片道15分ほどです。あらかじめ、昼食・軽食を駅前等でお買い求めのうえご来場ください。

分科会概要

本年の分科会は、大会1日目の9月26日に、6つの分科会を開催する。各テーマの概要は次の通り。①は企画者（敬称略）②が趣旨。

令和6年能登半島地震を踏まえた行政と法の災害対応の再考

①飯考行（専修大学）

②災害への行政と法の対応をめぐる立法・研究・実務の蓄積を、令和6年能登半島地震と奥能登豪雨、および本年5月に逝去した山崎栄一会員の業績からたどり直す。震災後の災対法・災害救助法改正に福祉の視点が盛り込まれた。これは被災者の人権とニーズから災害法をとらえるべきとした同会員の主張の具体化である。

南海トラフ巨大地震に備える長期・広域避難政策

①田並尚恵（川崎医療福祉大学）

②東日本大震災、能登半島地震と長期・広域避難はくり返されてきたが、帰還が前提の制度しかなく被災者は不利益を被る。行政制度の一つの住所・一つの共同体への所属という原則が生活再建を妨げる。関西学院大学「二地域居住研究会」のメンバーが、過去の災害と南海トラフ地震の調査をふまえ、複数地域に所属しながら生活再建ができる制度を検討する。

縮退する地域社会の復興学　―自治・記憶・コミュニティを支える新たな視点―

①山口洋典（立命館大学）

②人口減少・高齢化が進む地域では、災害発生以前から地域行事等の縮小・再編が進み、Build Back Betterを前提とした復興像のみでは地域社会の変容を捉えきれない。中越地震20年後の小千谷市塩谷集落の集落史から自治の変容過程を可視化する「尊厳ある縮退インデックス（仮）」と、七尾市田鶴浜における地域自治・記憶継承の実践等を通じ、地域主体の「縮災」の可能性を展望する。

震災から15年、福島の今と未来を語る

①加藤孝明（東京大学生産技術研究所／社会科学研究所）・松下朋子（福島大学）

②原発事故から15年が経つ福島は、長期避難の常態化、低い人口密度、所有者不在の民有地など固有の課題を抱え、地域再生は途上にある。第3期復興・創生期間では自立自律的・持続的な地域づくりへの移行が不可避となる一方、企業誘致等を起点とする「昭和型」施策の限界も見えてきた。住民・行政・企業・研究機関が現状を共有し、地域の持続可能の回復という視点から、今後の復興の道筋を議論する。

令和6年能登半島地震・奥能登豪雨後のこころのケアの実際とその意義

①足立由美（金沢大学保健管理センター）

②金沢大学の災害メンタルケアチームKEYPATは、大学生対象で行ってきた食育とコンサートを、奥能登豪雨後に特別支援学校で実施し、生徒、教諭らの心のケアにあたった。能登半島地震では、アザラシ型セラピーロボットPAROが能登6市町の高齢者施設と、特別支援学校でも用いられている。子供、大人、高齢者に広く適用できる、平時から続けるケア活動を紹介し討議する。

災害復興とコミュニティ・レジリエンス ―輪島市住民復興調査から―

①佐藤慶一（専修大学）

②防災科学技術研究所が2025年11月に実施した輪島市住民復興調査をもとに、高齢化・人口減少が進む能登半島における災害復興について議論する。特に、復興過程でコミュニティ・レジリエンスをいかに維持・向上させるか、さらには、調査で多数が回答した「変化を受け入れて新しい形にしていく」という将来像について具体を探索することを狙いとする。

復興スケッチ⑭

浜の暮らしと人をつなぐ古文書

東京大学大学院情報学環　中島 みゆき



坂下清子さん（左）宅を訪ね、撮影資料を集成した冊子を前に談笑する佐藤大介・東北大准教授。画面右の箱に原資料が収められている＝石巻市二子で2026年4月11日、筆者撮影

6月28日、大川小学校では「大川伝承の会」による73回目の定期ガイドが開かれた。2021年7月18日に震災遺構として公開されてから5年。式典の日と同じように晴れわたった青空に、さわやかな風が吹いている。全国から約80人が参加し、希望者は被災前の地域を再現したジオラマや河口付近も見学した。

大川小から3分ほど歩いたコンテナハウスでは、大川小卒業生・只野哲也さんが設立した「Team大川　未来を拓くネットワーク」による「あおぞらおはなし会」が開かれていた。絵本の読み語りや七夕飾りづくりの後、ふと只野さんが被災前に地域で撮影されたテレビ番組の録画を来場者に見せた。画面には、なつかしい漁師が登場し、漁や自然について語っている。

「のんびり村のお父さんだ」と、只野さんが指さした先に、一昨年6月に84歳で亡くなった坂下健さんの姿があった。坂下さんは漁協組合長を長年務め、1993年から妻・清子さんと体験型民宿「のんびり村」を開業し、津波により営業できなくなるまで約20年間、来訪者に半農半漁の暮らしを伝えてきた。

その坂下さんは晩年、20km内陸の移転先で一冊の青いA4ファイルを常に傍らに置いていた。2013年に古文書レスキューに入った佐藤大介・東北大准教授とNPO「宮城歴史資料保全ネットワーク」のメンバーが作成した「坂下家文書」の目録と主な資料の画像、解説が記された分厚いファイルを健さんは、災害公営住宅の居間で時折開いては愛おしそうに眺めていた。

江戸時代、現在の村長にあたる「肝入」を務めていた坂下家には、代々伝わる巻物があった。昭和初期に尾崎地区に大火があり一度避難させた後は、再建された坂下家の神棚に上げられていた。あと数センチのところで津波被害を逃れた文書は2013年、清子さんの知己をたどって坂下家を訪ねた佐藤さんらにより、保全された。デジタル撮影された資料は484点に上る。

佐藤さんの解説書によると、資料は江戸中期から明治初期のもので、戸籍にあたる「宗門人別帳」や年貢徴収に関わる文書、橋や堤の普請や塩田の運営、山林の利用や農漁業の営み、「薬師堂」信仰まで、浜の暮らしを伝えている。特に幕末、戊辰戦争の折、幕府や仙台藩の「脱走兵」と呼ばれる人々が函館・五稜郭に出発するまで尾崎浜に滞在した際の記録は詳細で、歴史小説のように面白い。

その古文書をめぐり今年3月、動きがあった。都内のシンポジウムに登壇した佐藤さんと筆者の雑談の中で資料や坂下家の現況について話題となり、佐藤さんが大川を訪ねることになった。その旨を清子さんに伝えたところ、「私も80歳を過ぎ、これをこの先どうしたものかと考えていたところだ」との話があった。佐藤さんの計らいで石巻市博物館への寄贈が決まり、4月11日に資料確認、12日に寄贈手続きがとられた。

11日、大川を訪ねた佐藤さんは、地域の女性たちによる花植え作業を手伝い親睦を深めた。今後について「博物館と連携し、歴史資料を読み解く会を開くなど、地域のために活用できるとよいですね」と話し、夢も広がった。12日、書類にハンコを押した清子さんは「安心した。これでご先祖さまに報告できる」と、淡いグレーの箱に納められた資料を見送った。

その日の午後、幼少期から震災までの話を、清子さんに聞いた。鷹揚で奉仕の精神に満ちた大叔母、戦死した親族、地域の変遷……何よりこの場所が大好きだから未来につなげたいという思いから「のんびり村」を開いた。グリーンツーリズムの先駆けとして、県主催のドイツ研修にも参加した。その際知り合った女性が、佐藤さんの活動とつながるきっかけとなった。

坂下家文書には、塩田を開くために一関藩の役人と交わした書簡や、山にスギやマツを植林し塩を煮る燃料に使った記録がある。浜ではサケやイワシ、ウナギ漁が行われ、女性たちはカキやハマグリを拾い生計の足しにしていた。「のんびり村」来訪者と塩づくりや漁業体験をしてきた健さんが、資料を大切にしていた理由がわかる気がする。

資料は歴史と人をつなぐ。そしてその資料も人のつながりによって残される。津波を生き延びた資料は、地域の人々の支えになってくれると、信じている。

「暮らしの記憶」と「災害の記憶」が交差する日まで
――ニュースレターコラム「復興スケッチ」から考える内発的復興――

中島みゆきさんは東京大学大学院情報学環客員研究員であり、毎日新聞記者として同社の知的財産ビジネス本部アートアーカイブセンターに所属しています。中島さんは2011年の東日本大震災で被災した宮城県石巻市の大川地区の暮らしの変化を、継続的に取材してきました。災害復興学会ニュースレターでは、2021年（vol.40）から「復興スケッチ」というコラムを連載し、大川地区の復興過程のエピソードを詳細に記述しています。

震災から10年以上が経ち、被災の痕跡は日々の暮らしのなかに溶け込みつつある今、「復興スケッチ」のお話を伺いながら、長期的な視点で災害復興の現場に携わることについて考えます。聞き手・構成は高森順子（同学会広報委員長）。

―― 中島さんが大川地区に出会ったきっかけを教えてください。

2003年度に毎日新聞で、写真家の本橋成一さんの「生命の旋律」という連載を担当したことがきっかけでした。本橋さんの写真を大きく掲載し、そこからイメージされる文章を添えるという、通常の新聞記事にはあまりないタイプの紙面づくりでした。アートディレクターの福田毅さんから「中島さん、もっと四角い感じで書いてよ」と言われるような、あまりないオーダーに応えていくのが新鮮でした。写真家の眼を通した現場に、自分なりの言葉をどう重ねるか。取材というより、共同作業に近い感覚だったのを覚えています。アジア通貨危機を経済部記者として経験し、アジア・アフリカ諸国を回ってきたなかで、一般には貧しいとされる地域を訪ねると、暮らしの文化の豊かさや人々の生きる力の逞しさ、自然の美しさに圧倒される経験をしました。そこから、地域が内側に持つ力を信じられるような場所を訪ね歩く連載を続けるようになり、そのひとつで出会ったのが、宮城県石巻市の長面浦で牡蠣の養殖を営む坂下健さん・清子さん夫妻でした。静かな入り江で牡蠣を育てながら、自分たちの手の届く範囲で暮らしを組み立てているお二人の姿が強く印象に残りました。石碑には「海洋は無限の宝庫なり」と書いてあり、そこに石巻の人たちの知性と詩性があると感じました。当時から、海岸清掃や消費地交流など、自主組織による地域活動が行われていた。そういう大川の人たちの暮らし方は、911の後から特に記者生活のなかで感じてきたグローバリズムの限界に対する、ひとつの地道な答えであるように感じたんです。こうして、連載の終盤、2004年3月に掲載したのが、坂下夫妻でした。



毎日新聞2004年3月7日「日曜くらぶ」掲載記事（本橋成一氏撮影、坂下健さん・清子さん夫妻）

―― 震災後の継続的な取材、そして「復興スケッチ」という連載に至るまでの経緯を教えてください。

取材した7年後、2011年に東日本大震災が起き、宮城県の沿岸部は大きな被害を受けました。長面浦も、隣接する大川地区も、津波によって集落や暮らしの姿が大きく変わってしまいました。かつて取材した場所がどうなったのか気になって、現地に入ったのが最初です。当時は復旧すらままならない状況で、それでもここに生き続けたいと願う人たちがいました。ただ、地域には被災状況や生業の違いなどから、隔たりも生まれつつありました。大川小学校では、学校管理下において児童・教職員84人が死亡・行方不明になっており、この事実にどう向き合うかといったことや校舎存廃議論も重なり、分断が深まっていきました。このような状況のなかで、私は震災前の大川を知る者という立場から現地に通い、家を失った人の生活再建の悩みを中心に、さまざまな立場の人の話を聴いてきました。行政の言葉が住民に届かないとき、住民同士の言葉がすれ違うとき、その「翻訳」のようなことが必要で、私もその役割を担えたらと思ったんです。災害

復興学会のニュースレターで連載の機会をいただいたとき、大きな「復興」政策の話ではなく、暮らしの手触りのようなものをスケッチのように短く切り取って伝えたいと思い、「復興スケッチ」というタイトルにしました。

――中島さんは新聞記者として大川に通うだけでなく、そこから、大学院で研究者としてのキャリアもスタートさせていますね。

大学院を受験したのは震災後3年目のことです。そのころ、行政と住民との対話が必要な場面が増えてきました。見守り続けたいという思いが強い一方、記事にするのは難しい。研究という立場でなら、通い続けることができるのではないかと考えました。地域をめぐる報道のあり方にも疑問がありました。大川小報道が過熱するなか、報道される人・されない人というかたちで、分断が可視化されていました。特定の子どもへの取材集中も、精神的負荷が気がかりでした。複雑な現実を複雑なままに、大学院で複数の専門家と話し合いながら、現地の観察を続けていくことで、自分の視点の偏りにも気づけるのではと、思ったんです。

非常に印象に残ったのは、2016年2月に行われた大川小学校校舎の存廃をめぐる「震災遺構に関する公聴会」（石巻市主催）での住民の方々の座る姿でした。ステージ向かって右側後方に「非撮影エリア」が設けられており、どんどん人が増えていく。メディアは左前方の人を取材する。この空気を覚えておかなければならないと思いました。



震災遺構に関する公聴会の様子（2016年2月）

――震災から15年が経過して、いまの大川の人たちの分断の状況はいかがでしょうか。

大川地区の隔たりは無くなったわけではありません。ただ、時間が経ったことで、ゆるやかにその分断を超える人たちが出てきているようにも感じます。

訴訟の原告となった人の中には、地域の暮らしをアーカイブすることに否定的な見方をされる方もありました。発災から津波が襲う51分間に何があったのか事実関係を明らかにし、再発防止を優先すべきだという考えからです。もちろんそれも大切です。ただ、家や家族を失い15km内陸に移転する人たちにとって、山と海と川に囲まれた自然の恵みや、断片的な思い出を共有することが、人のつながりや暮らしの連続性を維持することでもあるのです。神戸大学の槻橋修研究室と一緒に行っている、白いジオラマ模型に色付けをしながら被災前の街を想起する復元模型プロジェクト「記憶の街ワークショップ」では、震災前の豊かな暮らしに目を向ける話がたくさん出てきます。訴訟関係の方のなかには、そこに参加しづらいと感じるひとも多かった。ただ、最近になって、そのジオラマを置いてあるプレハブが雨漏りして困っていたら、訴訟原告だった方が直してくれました。そういうやりとりが重ねられていくことで、分断が過去のものになるかもしれない。それをこれからも通い続けて見届けることができたらと思っています。

――これから大川で特に見ていきたい動きはなんでしょうか。

毎日新聞での「生命の旋律」、災害復興学会での「復興スケッチ」からずっと続いている研究関心である「内発的復興」のありようを見ていきたいです。さらにいくつかの視点として、専門家と非専門家の対話、記憶の継承を考えていきたいです。大川地区はこれまで、報道の8割が大川小学校関連に占められてきました。私としては、そこからこぼれ落ちる声を拾っていきたい。「暮らしの記憶」と「災害の記憶」は、本来対立するものではありません、これらをいかにして交差させていくか。住民のみなさんそれぞれの自分史を伺いながら、その道ゆきを見守っていきたいと考えています。

研究者やメディアが災害を語るとき、どうしても「被災」という枠組みが先に立ってしまいますが、現地の方々にとってはその後も人生は続き、暮らしの記憶は紡がれ続けていくはずです。「復興スケッチ」が、制度や政策の視点だけでなく、こうした一人ひとりの時間の流れにも耳を傾け続けるきっかけとなればと思います。私自身も、大川地区や長面浦との関わりを続けていきたいと考えています。



大川震災伝承館に展示された「記憶の街」模型の前に立つ中島みゆきさん＝2026年8月15日

伝え続けるということ

石巻市震災遺構門脇小学校スタッフ　馬場 玲花


防災学習に取り組む子どもたち

2011年3月11日、私は12歳で東日本大震災を経験しました。あの日の光景や匂い、耳に残る音は、15年が経った今でも鮮明に思い出されます。

震災直後は、日常を取り戻すことに必死でした。失われた風景を前に「前を向かなければならない」と自分に言い聞かせながら過ごしました。しかし年月が経つにつれ、震災の記憶は社会の中で少しずつ薄れていくと感じます。震災を知らない世代が増え、「あの日」を経験した自分の言葉で伝える必要性を強く意識するようになりました。

私は現在、生まれ育った宮城県石巻市の震災遺構で、震災の教訓と記憶を伝える仕事をしています。来館者が真剣な表情で話を聞き、「初めて震災を身近に感じました」と話してくださるたびに、伝えることの意味を実感しています。

震災当日、小学校の卒業を控えた私は、からかわれていた物静かな同級生の男の子に対し、「なぜやり返さないの」と強い口調で詰め寄ってしまいました。その直後に大地震が起き、彼は避難の途中で津波に流され、帰らぬ人となったのです。あの日の言葉が最後になってしまったという深い後悔から、長年その記憶にふたをしてきました。

正直に言えば、震災からしばらくの間、「伝承」を他人事のように考えていました。つらい記憶を思い返すことに抵抗もありました。しかし15年という歳月を経て、ようやく伝承活動の本当の大切さに気付きました。震災を経験した私たちが語り続け、記憶が残ると、未来の備え、命を守ることにつながるはずです。

震災で失われたものは決して戻りません。それでも、震災を経験した一人として、これからも震災と向き合い続けたい。そして、あの日に感じた恐怖や教訓、命の尊さを、自分の言葉で次の世代へ伝え続けたいと思います。

能登半島地震の被災地で「少し先の未来」を共に描く

慶應義塾大学総合政策学部4年　飛川 優

私は東京に住みながら、石川研輪島市門前町の黒島という集落に通う生活をしています。

2024年8月、ボランティアとして初めて集落を訪れた私は、被災を受けて縮小開催となった集落の祭り「黒島天領祭」を体験。続けられてきた暮らしや文化の豊かさに感動すると共に、震災の爪痕や過疎高齢化の現実を目の当たりにしました。

どうすれば暮らしや文化を続けていけるのか。何かできることはないのか。衝動的に休学を決め、集落にある宿泊施設で働きながら、約1年間生活をしました。集落の方々と関係を築き、畑やわかめ漁、郷土料理など、暮らしを教わるようになっていきました。ボランティア等で集落を訪れる学生と住民を繋ぐこともしばしば。次第に、繰り返し集落に通う学生が増えていきました。


黒島公民館にて 住民と通う若者たち

震災後二度目の開催となった2025年の天領祭では、これまで集落に関わってきた若者たちの力を借りられないかと「ボランティア事務局」の役を任され、100人近くの若者の受け入れに奔走しました。

復学してからは月に一度集落に「帰省する」ようになりました。他にも集落がふるさとであるかのように継続的に通う若者が何人も現れ、「おかえり」「ただいま」の会話が日常的に生まれています。存続の危機にあった太鼓が復活したり、震災前から休止が続いていた冬の祭りが復活したり、「集落に通う若者と共に文化や暮らしを続けていこう」という空気が集落の中で生まれつつあると感じています。

未来を思い描くことが難しい過疎の被災地で、「また来年も祭りをしよう」「また一緒に太鼓を叩こう」そんな「少し先の未来」を一つずつ、共に描いていけたらと考えています。

本学会にて副会長を務められていた山崎栄一先生が2026年5月20日にご逝去されました。ここに、山崎栄一先生とご親交のあった皆様のお声を掲載し、先生のお姿を偲ぶとともに、謹んで哀悼の意を表します。

「なぜ逝った。山崎さん」

当時は珍しかった関サバの刺身が大分空港の寿司店で食せると耳打ちしてくれたのは、山崎先生だ。あれから15年余り。新しい研究会の立ち上げ懇親会で、ともに料理に舌鼓を打ったのは、ほんのひと月前のこと。彼の意を受けて来年の学会大会を東京でと交渉していたさなかの悲報だった。そりゃあないよ。山崎さん。あなたの知恵は希少なんだから。

関西学院大学災害復興制度研究所顧問　山中茂樹

私は、先生の突然の訃報を早い段階で耳にした立場にあり、その時は驚きのあまり言葉も出ませんでした。それ以来、未だに信じられない思いのまま、心の整理もつかずにおります。ついこの前まで、いつものように飲みながら語り合っていたではありませんか。そのお姿が今も強く焼き付いております。大学では、被災者支援や災害法に志を持つ多くの学生を社会へ送り出されました。情熱的でありながらも法制度に真摯に向き合う先生の研究・教育の姿勢を身近に拝見できたことは、私の大切な財産であります。早すぎるお別れが悔やまれてなりません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

関西大学社会安全学部教授　越山健治

真っ先に浮かぶ山崎先生の3つの足跡。

まず関学の災害復興制度研究所で練り上げた2010年の「災害復興法案」。

次に東日本大震災での「災害救助法　徹底活用」「自然災害と被災者支援」。

そしてその8年後にまとめた「被災者総合支援法案」。

特に3つ目は当時の山崎災害法学の集大成だった。

法案発表当時、先生は「私たちが無意識のうちに被災者を見捨てていることを忘れていないか。いま必要なのは“配慮”だ」と語られた。

先生、何とかしてもう一度会えませんかね。

弁護士、日弁連災害復興支援委員会元委員長
津久井進

被災者支援という分野を法学の観点で切り開いた第一人者であり、被災者総合支援法制定の政策提言を牽引する存在でした。災害時の個人情報共有や地域における災害対策・避難支援のための法制度構築を成し遂げてきました。山崎栄一先生の存在なくして災害復興研究の発展はあり得ませんでした。ニュージーランド研究の折に現地での新しい出会いに少し貢献できたことは誇りです。何冊もの本を共著で作ってきた仲間であり、兄であり、戦友でした。功績とやり残したことがあまりに多すぎませんか。まだまだ今じゃないでしょうという思いで溢れています。あまりにも早すぎる友の眠りの安らかなることを心から祈ります。

弁護士、博士（法学）
岡本正

山崎栄一先生とは、大学院の研究室が隣で、共通の談話室でよく話をしました。生年月日と血液型が同じなので、その日の運勢を教えてくださりました。当時は先生が憲法、私が国際政治を研究していたので、数年後に防災研究会で再会した時は驚きました。先生は被災者支援法制の拡充に尽力されました。先生の『自然災害と被災者支援』は私のバイブルです。行間に込められた思いを引き継ぎ、被災者支援制度の充実に取り組みたいです。

兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授
阪本真由美

山崎先生の突然の訃報に接し、何かの間違いであってほしいと心から思いました。先生とは、大分大学に在職されていた頃から学会大会等でお会いし、楽しい時間を共有させていただきました。何事にも真摯に向き合う、信頼できる研究者として敬意を抱いておりました。2025年5月22日、衆議院の特別委員会に参考人としてご一緒したのが最後となり、終了後に「修学旅行以来ですね」と言いながら、国会を背景に記念撮影をしたことは忘れがたい思い出です。先生の志を胸に刻み、私自身の活動に反映してまいります。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

東京大学生産技術研究所教授、東京大学社会科学研究所特任教授　加藤孝明

5月23日、山崎栄一先生の訃報を受け、しばし言葉を発することができませんでした。大分大学在任中から何度も被災者支援制度の必要性のご講演を聞き、支援制度の早期の充実をともに期待し、さまざまな提言を議論してきたことを想い出します。山崎先生の著書「自然災害と被災者支援」は、支援制度の確立に多大の貢献をしたと確信しています。

東日本大震災後、岩手、宮城、福島の被災者、自治体の調査を行なったことも昨日のことのように想い出されます。被災者支援策の充実を求め、改めて山崎先生と楽しいみちのく2人旅をしたいものです。

兵庫県震災復興研究センター事務局長　出口俊一

いつも柔和な笑みをたたえていた山崎先生。被災者支援の制度について語り始めると、その笑顔が真剣なまなざしに変わり、口調も熱くなった。東日本大震災の被災地を一緒に巡った時は、常に「被災者の視点」で考える姿勢がひしひしと伝わってきた。亡くなられる直前の2026年5月はじめ、兵庫県功労者（防災功労）の記事の中にお名前を見つけ、自分のことのようにうれしかった。復興学会の副会長として多大な働きをしてくださったことに、あらためて感謝申し上げます。

日本災害復興学会副会長、神戸大学特命准教授
磯辺康子